

熊本大学 × 熊本大学病院 × 熊本県医師会

脈々と現在に受け継ぐ — 医のこころと先進性

Kumamoto University

宝暦	再春館 宝暦6年(1756年)
明治	(官立) 医学校兼病院 明治4年7月(1871年)
	(私立) 熊本医学校 明治29年2月(1896年)
	(私立) 熊本医学専門学校 明治37年2月(1904年)
大正	(県立) 熊本医学専門学校 大正10年4月(1921年)
	(県立) 熊本医科大学 大正11年5月(1922年)
昭和	(官立) 熊本医科大学 昭和4年5月(1929年)
平成 令和	熊本大学 昭和24年5月(1949年)



熊本大学医学部の前身・熊本医科大学(1922年)

— 北里柴三郎が新千円札の顔になるといって、地元が盛り上がりついで。熊本は我が国の近代医学揺籃の地

北里柴三郎ら優れた研究者を輩出 熊本は我が国の近代医学揺籃の地

— 北里柴三郎が新千円札の顔になるといって、地元が盛り上がりついで。熊本は我が国の近代医学揺籃の地

小川 柴三郎は熊本県小国町の出身です。上京前の約3年間、熊本で医学を学んでいます。柴三郎が新札の顔になることは、郷土の医学関係者の誇りです。

馬場 熊本大学病院の起源は、宝暦6年1756年に藩主細川重賢公が建てた再春館までさかのぼります。そして明治3年1870年には藩立病院が創立され、以降かたちと場所を変えながら、歴史を刻んできました。本院がそつであるように、熊本には脈々と続く医学と医療の歴史があります。

福田 再春館では教育理念である重賢公の言葉が壁書として表されました。医の道は岐黄を祖述にし、仁術に基づく、故に尊卑を撰ばず、貧富を問わず、謝儀の多少を論ぜず、専ら本分を守るべき事と。要は貧富などを問わずに患者さんを診なさい、ということ。現在も、この言葉が熊本大学医学部の入学時に配付される学生便覧に記されているそつです。もう一つ有名なのが、川上の者は川上の橋を渡り、川下の者は川下の橋を渡り行かば、其者共廻り道なしに才能をなすべし、という言葉です。つまり川上の者

公の言葉が壁書として表されました。医の道は岐黄を祖述にし、仁術に基づく、故に尊卑を撰ばず、貧富を問わず、謝儀の多少を論ぜず、専ら本分を守るべき事と。要は貧富などを問わずに患者さんを診なさい、ということ。現在も、この言葉が熊本大学医学部の入学時に配付される学生便覧に記されているそつです。もう一つ有名なのが、川上の者は川上の橋を渡り、川下の者は川下の橋を渡り行かば、其者共廻り道なしに才能をなすべし、という言葉です。つまり川上の者

医の熊本の力

2024年7月、新紙幣が発行される。新しい千円札の顔として肖像画が採用されるのは、熊本県出身で日本細菌学の父とされる北里柴三郎だ。熊本は日本近代医学の先駆地として知られる。藩校に始まる古い歴史と伝統の下、柴三郎をはじめ後に日本の医学を牽引する優れた人材を輩出してきた。医への高い志は、現在も郷土の医療関係者に引き継がれる。特定機能病院の熊本大学病院を中心に多くの医療機関が連携して独自の医療情報ネットワークを築き、地域の安心と安全を支えている。2016年の熊本地震や新型コロナウイルス感染症による災禍においても、熊本の医療は確かなかたちで機能した。2024年新春に当たり、熊本大学の小川久雄学長と熊本大学病院の馬場秀夫病院長、そして熊本県医師会の福田稠会長の3氏による鼎談の機会を設けた。熊本の医学と医療について、朝日新聞熊本総局長の築島稔が現状と展望を聞いた。



熊本県医師会
福田 稠 会長

熊本大学
小川 久雄 学長

熊本大学病院
馬場 秀夫 病院長

のために川下の者のためにもそれぞれ橋を架ければ、目指す場所へ両者が橋を渡つて来られると。当時の社会からすれば、ずいぶん進んだ医療と医学への考え方です。そつした理念で再春館がつくられ、それが熊本大学に受け継がれているわけですね。

— 熊本が近代医学の発展で果たした役割とは？

福田 長崎が近代医学生誕の地なら、熊本は近代医学揺籃の地です。長崎の医学所で教えていたマンスフェルトというオランダ人医師を招き、明治4年1871年に熊本医学校が開校しました。このとき北里柴三郎をはじめ132人の学生がマンスフェルトから直接指導を受けました。

小川 衛生学者の緒方正規、産婦人科医の浜田玄達もマンスフェルトの門

大学の中長期的ビジョンを策定し 次代を開く医学医療の研究に注力

— 熊本大学で特に医学の分野で力を入れている研究があれば教えてください。

馬場 健康長寿の時代になり、今の小學生は平均寿命が107歳くらいになるとも言われています。そつした健康長寿になるための科学的な研究に力を入れています。また、ヒトレトロウイルス学共同研究センターでは、世界的課題である難治性ウイルス感染症について、鹿児島大学との連携で研究を進めています。さらに発生医学研究所や国際先端医学研究機構などが中心となつて、多角的な研究を進めています。

小川 熊本大学ではイニシアティブ2030という中長期的ビジョンを策

定しています。そこで掲げているのが「教育」「研究」「社会との共創・医療」です。大学全体のテーマの1つにするほどです。熊本は医療に力を入れています。2023年に大手科学専門誌が発表した国立大学の論文シェアランキングで、本学が生命科学の分野でベスト10に入りました。これは影響力の高い学術雑誌に掲載された論文を元に、論文数とシェアを算出したもので、各大学がその位置づけを大変気にしているランキングです。本学では、医学を中心に多様で高度な研究に取り組み、多くの論文を発表している自負があります。

— 今後、熊本で医学がどのように発展していくのか大変興味深いですね。

熊本大学 × 熊本大学病院 × 熊本県医師会

脈々と現在に受け継ぐ——医のこころと先進性

熊本のくに

コロナ禍の影響が続いた2023
半導体産業集積の明るい話題も！

——長引く新型コロナウイルス感染症の影響もあり、2023年も激動の年になりました。昨年を振り返っていただけですか。

福田 新型コロナが5月から感染法上の5類に移行されました。見切り発車的な部分があり、いささか不安でしたが、弱毒化して重傷者が出にくくなり、ホッとしました。ただ今後、ウイルスがどう変異するかということは不透明で、まだまだ警戒が必要です。そうしたなか、開業医の出

番が増えました。臨床経験を積み、自分たちのやるべきことが分かってきて、その役割を果たせるようになってきました。

馬場 一昨年末から昨年年始にかけて第8波のコロナの波が押し寄せました。多くの患者さんが来院し、職員にも感染者が出る中で、どこにか診療を続けました。6月からは、長くストップしていた病院内の面会を再開し、ようやく通常の姿に近づいてきた感があります。また、今年4月から

は医師の働き方改革が始まり、医師一人ひとりの労働時間管理が極めて大事になります。新しいシステムの導入をはじめ、そのための体制整備にも取り組みました。

小川 医学の話題からは離れますが、いま、熊本は半導体の話題で熱いですよね。世界的半導体メーカーのTSMCが進出を決め、それに伴う半導体産業の集積が見込まれます。こうした動きに合わせて、本学も急速に舵を切りました。2022年4月には先端科学研究部附属半導体研究教育センターをつくり、2023年4月、これを少し大きな組織にして半導体・デジタル研究教育機構を

設置しました。さらに2024年4月、学部相当の組織としては大学創設以来初めて、すなわち75年ぶりと

なる「情報融合学環」を新設します。併せて工学部には、「半導体デバイス工学課程」を開設します。そのための認可を文部科学省から正式に得ました。こうした一連の取り組みに、特に力を入れた1年でした。

コロナ禍の困難の中で得た経験値
貴重な学びと教訓を未来に活かす

——新型コロナが5類になり、私たちの上では1つの区切りが過ぎました。今回の感染拡大を総括していただけますか。

馬場 感染拡大を経て、私たちは

感染症にどう対応するべきかを学びました。国民は予防策としてのマスク着用や手洗いなど、感染に対する意識が変わりました。本院においては、通常診療と感染症に対する診療の両輪ごと回

円で地域の感染症に対するキーパーソンとして働いていただく。そうした取り組みを現在進めているところ

です。

福田 新型コロナの第1波が来たとき、右往左往したんです。日本の医学は世界と言われるのにどうしたことがと責められました。ただ、振り返ってみると、新型コロナによる死者数は世界の各国と比べて日本が極端に少ない。反省すべき点はたくさんあっても、日本の医療体制は間違っていない。これは大切なことだと思っています。県内で言うと、熊本大学病院が中心となつて重症患者を引き受けた。基幹病院でも次第に受け入れが広がった。私たち

開業医もワクチン接種など後方支援としての自らの役割を理解しました。現在は各所が機能して、受け入れができています。次に感染拡大があっても、対応できる状態だと思っています。

小川 ワクチンの効果や治験に関するところなど感染症への知識や関心が、どちらかと言うと日本人は低かった。コロナの流行で、私たちは辛い思いをしましたが、得たものも多々あります。この学びを今後に活かさないといけません。

——産学連携も大学にとって重要なテーマですよね。

小川 2023年4月、本学にオープンイノベーションセンターを設置しました。センターは、外部との垣根を外し、学外の知識や情報を積極的に取り入れて研究を推進するための施設です。大学単独の力では限界があります。民間には潤沢な資金も、大学にはないノウハウもある。だからこそ、産学連携が大切なんです。いま、資金力のある企業は、生命科学・ライフサイエンスの分野に投資を望む企業が多い。私自身、本格的な基礎研究で半導体を使えば、研究が大きく伸びると考えています。ここでもやはり産学連携の力を活かしたい。半導体産業の集積が見込める熊本で大きな可能性を秘めた、まさに本学が取り組むべき分野です。ちなみに企業によっては大学の敷居を高く感じたりもします。そういうとき、「コミュニケーション」を取ってくれるのが、豊富な情報を持つ銀行です。そうした他力も積極的に活かしていきます。

馬場 これは本学医学部に限ったことではありませんが、給与などの理由もあって、卒業後に大学院に残らず、一般の民間病院へ行く医師が増えていきます。医学部の研究者が減り、結果として基礎研究などの生産性が落ちていきます。

小川 大学にずっと残らなくてもいいんです。たとえ時期であっても、大学で研究して論文を書く習慣を身につける。それは自身の将来にも役立つ経験となるはずです。このままでは日本の医学の科学力低下を招いてしまつ。この流れを何とかしたいと考えています。

産学連携で大学と企業の力が融合
大学独自のプログラムで学生支援

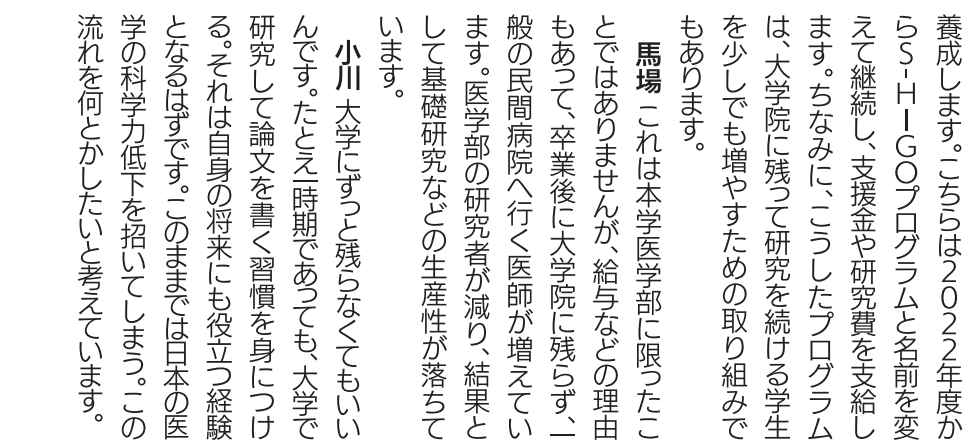
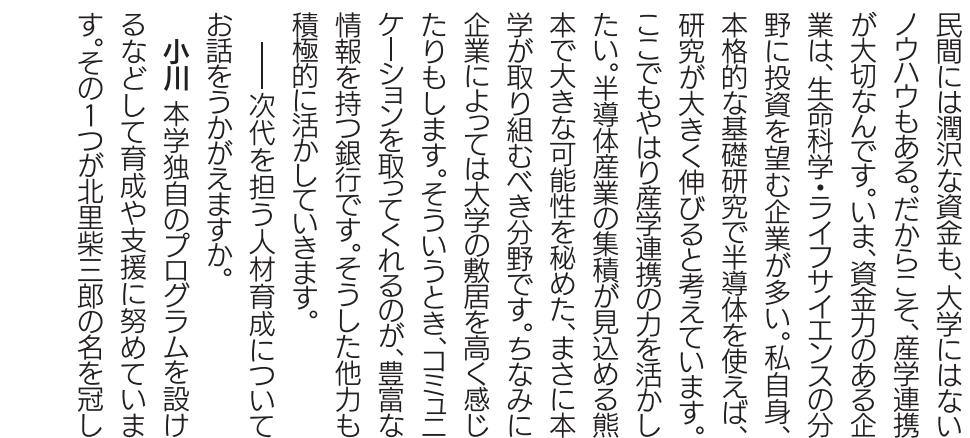
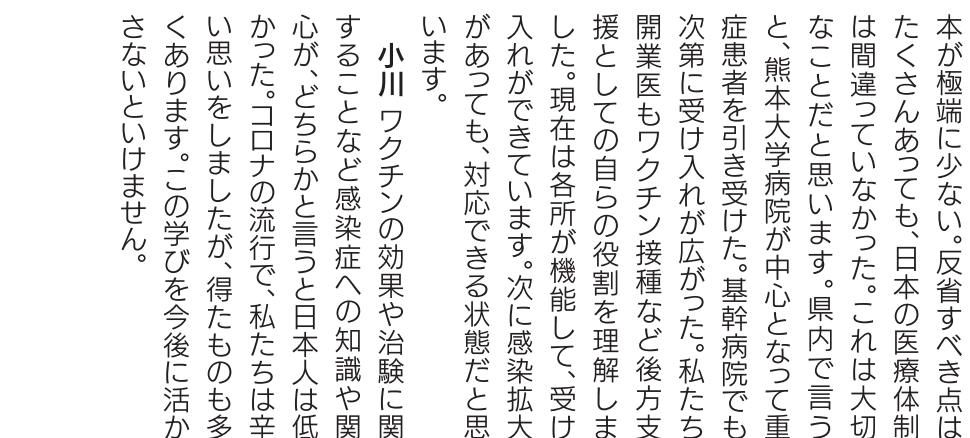
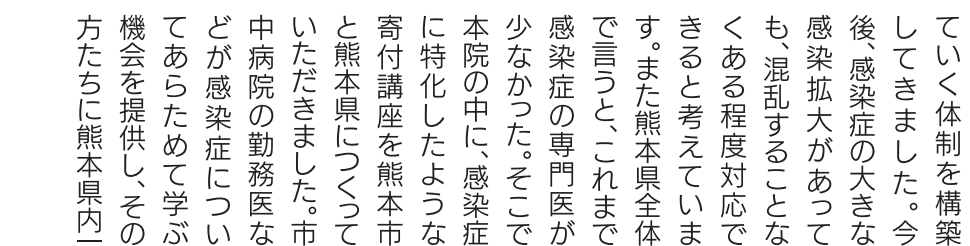
た柴三郎プログラムです。医学部学生時代から、大学院授業の先取り受講を可能にするなど、学生が研究に専念しやすい環境を提供します。また、HIGOプログラムでは、医学や薬学などの健康生命科学の知識をベースに、地域と世界を結びつけて、グローバルな課題を解決できるリーダーを養成します。こちらは2022年度からS・HIGOプログラムと名前を変えて継続し、支援金や研究費を支給します。ちなみに、こうしたプログラムは、大学院に残って研究を続ける学生を少しでも増やすための取り組みでもあります。

——次代を担う人材育成についてお話をうかがえますか。

小川 本学独自のプログラムを設けるなどして育成や支援に努めています。その1つが北里柴三郎の名を冠し

熊本大学
おがわ ひさお
小川 久雄 学長

熊本大学医学部卒。1984年より31年にわたり同大学に医員、助手、講師、助教授、教授として奉職。国立循環器病研究センター理事長などを経て、2021年、第14代熊本大学学長に就任。専門は循環器疾患全般、多施設共同臨床研究。



リアルタイムの送受信で情報共有 くまもとメディカルネットワーク

——くまもとメディカルネットワークについてお聞きます。どのような経緯で始まり、どのような役割を果たしているのでしょうか。

福田 もともとメディカルネットワーク自体はたくさんあったんです。た

くまもとメディカルネットワーク
同意数
413,839件
利用施設数
791施設
カード発行枚数
115,927枚

2023年11月20日現在
©熊本県医師会/メディカルネットワークHPより



定を結んで立ち上げると、特に馬場先生が中心になって力になってくださり、登録が二気に広がった。いくつか課題もありましたが、一つ一つクリアしてきました。今や日本一のネットワークだと思っています。

馬場 大学や民間病院、診療所、薬局、介護施設などいろいろなところの情報データを共有できる優れたネットワークです。現在、登録が11万人を超えました。数年前の九州豪雨では人吉地区で球磨川が氾濫し、病院から多くのカルテが流されましたが、くまもとメディカルネットワークの中に患者さんの情報があり、すぐに薬を出すことができました。また、別の病



熊本大学病院
ばば ひでお
馬場 秀夫 病院長

熊本大学医学部卒。米テキサス大学医学部、九州がんセンター消化器外科医長、九州大学大学院消化器総合外科助教授、熊本大学消化器外科教授、生命科学研究所副研究部長・医学部附属病院副病院長などを経て、熊本大学病院長・熊本大学副学長に就任。専門は消化器外科学。

医師の不足と偏在は全国的な課題 安全安心な地域医療を守るために

——熊本県の地域医療の現状と課題について教えてください。

馬場 熊本県に限らず、医療界の大きな課題の一つが地域偏在です。医師が都会に集中しやすい。また同じ地方であっても県庁所在地に集まりやすいという著しい傾向があります。

福田 熊本は大学病院などがある熊本市への県内アクセスに優れ、僻地や離島も多くな、地政学的には地域医療が展開しやすい土地です。津々浦々に開業医がいて、誰でも医療が受けやすい体制にありました。ところがその良さが損なわれてきている。やはり医師の不足と偏在という問題があります。地方の医師は高齢化が目立ち、世襲の良し悪しは別として、地方の若い医師の多くは世襲医師という現状があります。医師だけでなく看護師も不足し、偏在しています。特に地方の大きな戦力である准看護師になる人が減っています。地方の有床診療所も減っています。無床診療所で代替しよう

だ死屍累々で、ほとんどどうもくいつていなかった。ところが熊本県医師会ですることになって、予算がついた。無駄にならないようにと思索していたら、助けてくださったのが熊本大学の先生方でした。大学と県と医師会とで協

にも、夜間は無医村状態になってしまふ。地域医療を守るために、こうした課題を何とかしなくてはなりません。馬場 本院では、大学勤務の医師を県内約280施設へ診療の手伝いに

院で撮った写真などをリアルタイムで送受信できることも特徴です。例えば患者さんの状態が急変してヘリコプターで大学病院へ移送するようなケースでも、到着までに必要な情報を把握できるので、すぐに診断治療を行える。人の手間も省けます。蓄積されたデータは、今後ビッグデータとして、医療だけでなく多様な領域に活用できるよう、新たなエビデンスを構築するのにも役立てられます。

派遣しています。さらに看護師の交流事業を昨年から始めました。地域の拠点病院の看護師さんに、本院に来てもらって研修してもらつ。一方で大学病院の看護師が地域の拠点病院に出張します。こうして相互に人事交流をしながら、地域の医療レベルの均てん化と言いますか、水準を上げていく取り組みを進めています。

大学病院にアメニティー棟を建設 ライトアップで心に希望の灯を！

——熊本大学病院は約20年を経た再開発工事を終えて2年が経ちます。その後の取り組みについて教えてください。

馬場 ハード面では、薬局やレストラン、コンビニなどが入るアメニティー棟を建設します。今年12月の竣工に向けて準備を進めています。また、駐車場の増設も現在検討しているところで、同じく検討段階ではありますが、老朽化した看護宿舎をリニューアルして、看護師さんが入るだけでなく、ホ

——新しい年が始まります。2024年の取り組みについて教えてくださいいただけますか。

小川 2022年度、内閣府の地方大学・地域産業創生交付金事業に熊本県が採択されました。やはり半導体の存在が大きかったと考えます。こうした予算を活かしながら、オープンイノベーションで研究と産業活性化に取り組みたい。新設する情報融合学環では、医学部の教授による講義も実施します。半導体とライフサイエンスをテーマに、新しい機器や新薬の開発など、多様な研究を進めていきます。

馬場 順を追って話せば、まず1月に総額約46億円をかけて本院の情報システムをすべて入れ替えます。また、マンスフルトと北里柴三郎の胸像を病院外来の入口に設置します。4月からは、医学部の5・6年生を対象にした、熊本大学病院の奨学金制度を開始します。そして5月ごろになると思いますが、スマートホスピタル構想をスタートさせます。外来の混雑緩和を目的としたもので、導入すれば患者さんは来院時にスマホで受付の手続きをするようになります。診察の順番が来たらスマホに合図が来て、診察後は窓口で会計することなくそのまま帰宅できます。こうしたスムーズな外来診療の流れを目指します。また8月には病院機能評価の更新があり、現在その準備に追われています。

福田 いま、第8次保健医療計画を策定中です。これに地域医療の課題をどう盛り込むかが重要で、それぞれの医療圏で会議を開き、情報や意見を集めているところです。また、医師会の組織強化にも努めたい。特に入会の割合が少ない勤務医の会員数が増えるよう、力を入れて働きかけたいと考えています。そして今年度、医療・介護・障害者福祉のトリプル改定があります。物価が上昇し、どの医療機関も経営が苦しい。看護師をはじめ職員の給料を上げるには、医療費が上がらないことには始まりません。適切な医療費の底上げと言いますか、それをどうお願いしていくかということも課題です。

——最後に2024年の抱負をお話いただけますか。

大きな変革の年となる2024年 強い決意を胸にスタートを切る！

小川 熊本は、地域自体が100年に1度という変革の年です。大学もおそらくここが変わらないと変われない。100年に1度の覚悟をもってやっています。僕が好きな言葉は「コミニケーション」。いろいろな人との「コミュニケーション」を大切にしながら取り組めば、本学も熊本もさらに伸びると確信しています。

馬場 ようやくコロナ明けということで、大学病院のさらなる発展を本格的に目指します。TSMCの熊本進出により外国人の方がこれまで以上に多くなる。設備面を含めて多言語に対応できる国際性豊かな病院となるよう努めます。また、AIやロボットが目覚ましく進歩しています。積極的に導入することで、働き方改革で医師の労働時間が減る分を補完していく体制づくりを進めます。

福田 抱負ではありませんが、近ごろ頭をよぎることを話します。AIが普及しています。ディープラーニングなどもコンピュータは得意ですから、医療がそこの方向に進んでいくことは自明の理です。江戸時代を含めて近代医学導入の時期、医者になった人の多くは通詞、つまり通訳でした。ですから将来はコンピュータエンジニアが医者の代わりをするようになるのでは。そうした時代を想像してみたりしています(笑)。

——今後AIの活用は欠かせないでしょうが、それでも医療や医学で肝要なのは人の力です。皆さまのお力で熊本の人を診て、人を育てていただくことに希望を感じます。引き続き2024年も、熊本の医療と医学をよろしく願います。

熊本県医師会
ふくだ しげる
福田 稠 会長

久留米大学医学部卒。熊本大学医学部大学院研究科修了。国立熊本病院勤務を経て、1981年、福田病院院長就任。2004年～2010年、熊本市医師会会長。2010年から熊本県医師会会長を務める。専門は産婦人科全般、周産期。

